

中国社会の表と裏に接して

—世界第二の経済大国に疑問—(前編)

軍事アナリスト 西村 金一

はじめに

中国については様々な見方・分析がある。例えば、壮麗な建物が立ち並ぶ北京の大通り、言い換えると目立つところだけがすばらしい、まさにショーウィンドーのような大通りだけを見た人とその陰に隠れた裏通りや田舎を見た人とは、見方が全く異なる。また、中国が発刊する統計年鑑のデータを見る人、「中国人民網」などの公式見解を重点に見る人、中国との事業を展開しているために中国に気を遣わなくてはならない人では、それぞれの発言は異なり、分析結果は多岐多様にわたる。

私は、一九九四年に上海と北京へ、一九九五年に中国と約五〇七キロ離れた向かい合う台湾金門島に行った。二〇〇八年から二〇一一年までは、自衛隊定年退職後、日本の最大のシンクタンクでの仕事を通じ、中ソ国境の綏芬河・東寧、旧満州と呼ばれた東北地域の伊春・北安・齐齐哈尔・鶏西・瀋陽・牡丹江・哈爾濱・佳木斯、北朝鮮国境に近い琿春・延吉・通化、夏には四十度以上が毎日続く唐山・天津・保定・石家荘などの

北京周辺、上海の隣で美しい西湖がある杭州、海鮮料理が美味しい南の広州などを訪問した(図参照)。それぞれの所に一週間ほど滞在した。仕事と市民生活に関心を持って、ショーウィンドーの表通りばかりではなく、市民生活と直接関係する薄汚い裏通りも見た。さらに中国長期在住の友人から聞いたことなども整理し、中国の知識が豊富なスタッフとともに統計データを参考に『手にと

るように中国がわかる本』(かんき書房)を出版した。今、改めて、中国国家統計局のデータ、ヒアリングと私が現実に接したことを合わせて、中国の社会・国民性・軍将兵の現状



を分析した。

以下、尖閣問題で過激な中国人、監視される社会、桁違いにひどい環境汚染、中国商品の信用度、立派すぎる建築物や物、賄賂、会社内部の共産党社会、とんでもないトラブルの遭遇などの疑問について紹介し、考察する。そして、これらが中国に対する疑問を解決する糸口になり、中国研究の一助となればと思う。

一 尖閣問題で過激な中国人

中国では、油断していると大金を請求されるトラブルに遭い、騙されそうだと感じることもある。また日本の評論家の中には、反日感情を剥き出しにしたデモの映像を見て「江沢民元国家主席の反日教育の影響によって、日中間の問題が生じるとこのような過激なデモに発展する」とコメントする人がいる。

私も、一部の中国人には、ちょっとしたこと人間関係を急速に悪化させてしまうような感覚を持つこともある。しかし、私が見たり接した限りでは、生活するのに一生懸命な中国人が、尖閣問題であのような過激な行動に走るのかと疑問が生じた。

それは、中国人に実際に会って、中国人に親しみを感じるころがあったからだ。その一つは、仕事で中国軍将兵と一緒に、暑い日も寒い日も化学防護服を着て、日本軍が残したとされる遺棄化学兵器（砲弾）の応急処理を行った。防護服を着ると息がしづらい。また、夏は蒸し風呂のような暑さで疲れる。そのような中で、若い将校と作業方法を調整し、若い兵士と一緒に汗水を流して砲弾の処理をした。そして、作業が終わり防護服

の面覆いを外した時には、互いにお疲れ様の笑顔になれた。夜の宴会では、乾杯して盃を飲み干すのが習わしだ。しかし、私が酒を飲めないことを知ると「無理して飲まなくていいよ」と言ってくれた。現場の中国の人たちと接すると、最初はとっつきにくい感じがあるが、お互いに打ち解けた関係を作ることができた。中国人のほとんどは温厚で親切だと思った。

二つ目は、二十年前に上海伊勢丹の公衆電話に、航空チケットを忘れた時のことである。航空チケットを見つけた子供と母親は、近くの店員に日本人がどこかにいないかと聞いてくれて、レストランにいる私を見つけ、チケットを渡してくれた。その時の母子の笑顔は、とても新鮮で温かかった。日本に帰れなくなるころを、中国人の親切な母子に助けられた。

三つ目は、哈爾濱と齊齊哈爾の広場で社交ダンスで交流した時のことだ。中年男女が普段着よりもちょっとおしゃれをして、ダンスシューズを履き、中国式モダンダンスとラテンダンスを踊っていた。哈爾濱では、踊る人が二百人くらい、ギャラリも同数。踊りは、日本と少し違っていた。私は当時、中国語を話せなかったが、ダンスが得意だったこともあり、踊りに参加した。通訳に「日本人だけど踊りに加わってもいいか」と尋ねてもらいと、最初はなんとなく怪訝な



齊齊哈爾のダンス風景

顔をされた。ある積極的な女性が、興味があったのか「踊りましょう」と誘ってくれた。私も競技ダンスA級だったので、ここでは目立つ踊りができた。すると、多くの中国人女性が誘ってくれ、夜の楽しいダンスタイムを過ごすことができた。

斉斉哈爾では、ダンス会長に日本からのお土産を渡したところ、「日本人が来て踊ってくれた記念に飾って置きます」と言ってくれた。その間には、冷たい反日感情などは全くなく、温かい思いやりと親しみを感じた。

以上のことから、尖閣問題に関するデモに参加している人の多くは、一部の過激な人たちや党関係者からの指示で行動している人なのではないかと思うのだ。

二 監視される社会

最初に国の仕事で中国に行った時、私の単独行動時に限って、いろいろと不思議なことが起きた。北京の喫茶店に入ると、私に続いていかつい顔の中国男性が入ってきて、私の真向かいのテーブルに座った。不思議なことに、私以外のお客さんがいないのに、私の顔が見える真向かいのテーブルに座った。結果、お互いに見たくない顔を見ることになった。私が二時間ほどそこで本を読んでいたのだが、その間ずっとその席にいたのだ。

按摩あんまに行った時は、私に続いて入ってきた中国人がいた。その人は、マッサージを受けた気配はなくロビーにずっと座っていた。ホテルのレストランの価格表を真剣に見ていた時、高級ホテルに宿泊するような服装ではない中年の親父が近づいてきて、「おもしろいものがありますか」と聞くと、すぐにさっさと

歩いて行った。聞くのであれば、メニューくらいは見るだろうに。ダンスのシャドートレーニングをしていると、突然怪しげな男が私を見に近づくこともよくあった。

これらは、とても自然な行動とは思えない。つまり、「私を見張っているぞ」というシグナルではなかったかと思う。また、日系のホテル内でも、廊下の四隅、エレベーターホール、エレベーター内に監視カメラが多く設置され、監視されている。

三 桁違いにひどい汚染

(一) 大気汚染

私は一九九四年、今から約二十年前、北京にある国家環境保護局にヒアリングに行った(写真)。海外の工場が中国に進出し始めた頃で、火力発電所や小さな工場からの排煙や有害物質の排出、車の排気ガスにより、空気や川の水が汚染され始めていた。北京の高層ホテルからは、遠くの煙突から煙が大量に排出されているのが見えた。上海の発電所の付近では、会社研修をしていた日本の企業経営者が、発電所の煙の硫黄成分で、「目が痛く、硫黄の臭いもすごい」と言い、そのひどさに驚いていた。当時、中国に進出していた十数社の外国企業を見て回ったが、煙を出している会社は一つもなかった。

二十年後の今、あの時の大気汚染とは比べものにならないほど強烈な環境になった。北京空港に降りると、目は痛いし



鼻も詰まる。太陽を直視しても眩しくない。夜、市内のネオンはぼんやりとかすみ、星は当然見えない。

二〇一三年二月の春節の全国七十四都市の大気汚染は、PM_{2.5}の平均数値が一立方メートルあたり四百二十六マイクログラム、日本の環境基準三十五マイクログラムの約十二倍だ。大原では千二百七十七マイクログラム、石家荘では五百二十七マイクログラムを観測した。日本の環境基準の約十五〜十六倍だ。大気汚染は、脱硫装置を付けていない小さな工場からの排煙、発電所からの排煙、各家庭の石炭を燃やす煙、そして車の排気ガスが、主な原因である。

中国の大気汚染の主な原因の一つであるガソリンの硫黄含有量の基準値は、各国で定められている。中国のほとんどの地域で使用されている「国3」と称するガソリンの硫黄含有量の基準値は、百五十マイクログラム（五十億分の一）以下となっている。EUのガソリン「EURO-5」のその基準値は十マイクログラムで、中国のその基準値は、EUの「EURO-5」の十五倍である。そのデータは、PM_{2.5}の日本の環境基準と中国北京の大気汚染の比較データに類似している。中国政府は、ガソリンの環境基準について、五年後の二〇一七年末に日本や欧州並みに引き上げる方針を決めて、石油関連企業にも品質向上の指示を出した。その基準が達成されないと、北京まで七十キロに近づいている砂漠化とともに重大な環境問題になる。

不思議なことに、北京に何度も行っていると、馴れて大気汚染が気にならなくなる。中国人民は、二十年間の時が過ぎて汚染したことで麻痺しているのではないか。無意識のうちに侵されていることに気がついていない。二〜三年前には、北京市内

を歩いていて、マスクをしている中国人はいなかった。

北京の国家環境保護局は、二十年も前に大気汚染が問題になっていることに気付いていたが、中国人民には報道せず、警告も与えていなかった。私や同僚は、強烈な大気汚染だと感じていたが、中国人の友人や通訳も大気汚染ではなく、「北京特有の霧」だと言っていた。北京市民の間ではそれほど大騒ぎになっていなかったのだ。最近、PM_{2.5}の計測数値が公表され、やっと気づいて問題視しだした。これから北京では、大気汚染による病気が顕著に現れてくるであろう。習近平国家主席も同じ空気を吸っているのです、人民だけの問題ではない。

大気汚染は、生命の危険性もあるのだが、北京の市民はデモをやってはいない。北京政府や企業に対するデモの呼びかけもない。中国人は、北京の大気汚染PM_{2.5}の影響を受けてどれほど耐えられるか、再び人体実験の被験者になるつもりなのか。中国政府が環境基準を上げる、すると燃料費が上がる、電気代

が上がる、製品の値段が上がる。環境はよくなるが、外国の企業が中国から撤退し、中国の経済が減速するなど

中国と先進国のガソリン硫黄分規制値			
EU	中国	日本	PPM
EURO-3 (FY00)	国3 (FY05)	(FY04)*1	150以下
EURO-4 (FY05)	国4*2 (FY08)	(FY05)	50以下
EURO-5 (FY09)	京5*3 (FY13)	(FY08)	10以下

*1 : 100以下、*2 : 北京、上海等3省のみ、*3 : 北京市のみ、北京ロイターより



スモッグでかすむ天安門広場 (出典) AP ニュース2013年1月29日

の流れとなる。

日本でもPM2.5が流れて来ると非常に心配されているが、日本の九州に流れてくる量は、北京と比較するときはほどではなく人体に影響はないと言われる。日本人に影響がでる前に、中国人が病気になる。日本にも悪影響があるからといって技術支援をすべきといった声があるが、浄化装置などの支援は対中国に対する外交の一つのカードとして活用すべきだ。

(二) 水汚染

中国広東省「南方都市報」によれば、「中国国内の六十四万の都市で『深刻な地下水汚染』が発生しており、総延長十四万キロの河川は、その約四十万の水域が重度の水質汚染に見舞われている。大気汚染に続く環境問題として浮上してきた」と報道している。政府系ニュースサイトの「中国人民網」は、南方都市報の記事を引用した上で、山東省で一部の工場が有害物質を含む廃水を地下に高圧で注入したことが発覚し、地元当局が調査に乗り出したと伝えた。

中国青年報は河川の水質汚染源として、工場廃水、農業など有害物質を含む農村の排水、都市の生活排水を合わせて「三大元凶だ」と指摘している。

世界で水道水が飲める国は、十三カ国（日本、ニュージーランド、アイスランド、アイルランド、フィンランド、ドイツ、オーストリア、スロベニア、クロアチア、アラブ首長国連邦、モザンビーク、レソト、南アフリカ）のみである（平成十六年版「日本の水資源」国土交通省）。

米国、欧州、マレーシアやタイのホテル（地方も含め）では、

水道水は飲めないが透明である。私が何度も宿泊した中国の各市の五星ホテルの水でも、洗面所の水や風呂桶のお湯は、薄茶色だ。コップに入れると泥が混じっている時もある。五星のホテルでこのレベルだから、地方の住民に供給される水はもっと悪い。一晚中嘔吐と下痢の苦しみを味わったことがある。それ以降、中国の水道水は飲まないし、歯も磨かない。

町を流れる河川では、ゴミが堆積している。川辺や流れている水も汚れて臭い。流れがない川は、自然ではない絵の具のような白、赤、黒、青、水色あるいは緑色であることもある。中国は、世界の製造工場になったが、ゴミ処理能力が不足しているためにゴミを川に流す。河川が汚染され、その水を飲む中国人の生命に大きな影響を与えるようになった。

このような河川の汚染では、その河川や近海では魚が捕れなくなる。汚染された魚を長期間食べていると病気になるだろう。中国の漁船は、安心安全な魚を求めて日本の尖閣諸島付近、韓国領海付近、日本海にまで進出している。そして増加する。中国の河川の汚染対策をやらぬ限り、中国漁船は中国近海から離れ、周辺諸国の領海に強引に入ってきて漁業活動を行うことになる。

河川に捨てられ海に流されたゴミは、黒潮の流れに乗って日本にも、世界にも流されていく。一部の科学者は深刻に受け止めているが、人民の関心は薄いようだ。

中国の金持ちらは、ペットボトルの水を飲むが、その三分の一は偽物と言われている。中国人はこのように桁違いにひどい汚染になぜ激怒しないのか疑問である。